

ばってん

事務長会報第20号

平成18年10月1日

長崎県公立学校事務長会

長崎西高等学校内
〒852-8014 長崎市竹の久保町12番9号
電話 095-861-5106



ホテルモントール長崎
TEL 095-822-2251
長崎市筑後町4番10号

1700字の言いたい放題

村中宗孝(諫早高等学校)

○原稿なんか書きたくない。

9月1日、広報部長から電話があった。“ばってん”の原稿依頼である。真面目な人が優しい声で真剣に「あなた以外の人にはみんな書いてもらいました。残っているのはあなただけです。」などとおっしゃる。妙にすごみがある。困ったことになった。前回いろいろ理由を付けて断った経緯がある。電話の向こうの「もうわがままは絶対に許しませんよ。」という怖い顔が目に浮かんだ。すっかり取り乱し、しばらくの沈黙の後、観念して「はい。書きます。」と言ってしまった。そしたら「書いてもらうのは1700字程度です。一行は23文字ですからね。締め切りは9月25日です。」などと極めて事務的におっしゃる。ほとんどどうわの空であった。

○文章が書けないんです。

私が受けた採用試験の小論文のテーマは「公務員の職務について」であった。書き出しは「公務員は公僕である。」から始めた。起承転結に心がけ頭の中には4コマ漫画を思い浮かべていた。スラスラ書けた記憶がある。

昔は文章を書くことは苦痛ではなかった。むしろ人前で話すより書くことの方が楽であった。それが勤め始めてすぐに壁に突き当たった。行政的な表現に馴染めないのである。冷たく、味気なく、堅苦しく、一文が長い表現。私の起案文はいつも真っ黒になって戻ってきた。特に読点を打つ場所がごとく訂正されていた。学校で習ったことが通用しないのである。それ以来すっかり自信をなくしスランプに陥ったままだ。今でも公務員になったから文章が書けなくなったと本気で思っている。

それでも現実には、初任者研修で「文書事務の手引」を用い知ったかぶりに指導をしている。他人の起案文の修正もしている。恐れ多くも国語の先生の文書まで。きつと国語の先生は私のことを怒っているに違いない。

○短所も長所に化けることがある。

「今日はお父さんと海水浴に行きました。タマゴ焼とおにぎりを食べました。うまかったです。終わり。」小学校時代の絵日記はいつもこんな感じであった。今でも喋ることが苦手でおつきらぼうで愛想のない話し方は変わっていない。文章も喋り方同様に単語を羅列したものになってしまう。担任の添え書きはいつも「もう少しがんばっ

て書きましょう。」であった。花マルなど一度ももらったことはない。

しかし、世の中そう捨てたものではない。公用文には随分手こずったが、愛想のない紋切り型の表現が活かされる時がきたのである。「マスター資料や予算要求資料は簡潔に。箇条書きで。」という上司のありがたい指導には小躍りしたいくらいであった。「それなら私にもできます。任せてください。」と、以来30年以上も箇条書きに徹した資料作りに励んでいる。

○あと2年で「結」を迎える。

最近まで全く考えてもいなかったが、あと2年で定年退職になる。採用試験の「起承転結」から始まった公務員生活も「結」を迎えることになる。

振り返ってみると私は相当に頑固であった。そのためしばしば周囲の人に迷惑をかけてきた。それでも特大の石頭の中には秘密兵器の真っ白いカンパスがある。そこには自由に絵が描ける。常に新鮮な発想で仕事をしたいと願っている。

時代も大きく変わった。情報化社会にはすっかり取り残されてしまった。ただ、これからの事務長は想像以上に苦勞の多い大変な時代を迎える。

こんな時代こそ初心に戻り、思い出して欲しい。

- ・『人は財産である』出合いを大切に。
- ・『仕事の基本を見直す』前例やマニュアルに頼りすぎない。条例・規則が根拠。
- ・『チームの一員である意識を』チームの一員であることを自覚し協力して業務遂行に当たる。
- ・『健康が第一』何よりも一番大事なこと。

先輩から指導されたことの一部である。当たり前のことだが大切なこと。今度は私たちが後輩に伝えていかなければならない。

最後に柄にもなく、真面目に、“ばってん”の巻頭を書かれた19名の先輩方を見習い、パツチリ決めようと、妙に力んで、ペースを乱した。慣れないことはするものではない。無理をしすぎて指定字数を超えてしまった。得意のカタコト言葉が出たところで、「結」としたい。

終わり。

「～強者どもが夢の跡～有商閉校」

長崎県立有馬商業高等学校 川村 清 隆

有馬商業高校は口加高校北有馬分校、島原南高校有馬分校を経て、地域全体の教育にける熱意と情熱のもと全面支援を受け、立ち上げられたと言っても過言でない学校であり、昭和49年に独立してから現在まで地域と共に歩み地域に支えられてきた高校である。

有馬の地は古に思いを走らせれば、有馬藩の居城であった「日野江城」を抱き島原半島の中心として栄え、また有商の所在地は歴史上有名な「島原の乱」ゆかりの地で幕府軍方の本陣跡に立地している。

前を望めば有明海で天草の島々を背景に船が悠々と往來し、後ろに平成新山がのぞき素晴らしいロケーションの中にあり、これ以上ない教育環境にある。

この有馬商業が県教委高校改革第二次実施計画により平成19年3月閉校と決定し、平成17年度から募集停止になった。現在の3年生108名を閉校という悲しい出来事にもくじけず、モチベーションを下げることなくとにかく前向きに、有商最後の卒業生として全員無事に送り出すために教職員一丸となって盛り立て、涙ぐましいほど献身的に生徒に接している先生方には本当に頭が下がる。純朴実直で高校生らしさにあふれ、厳しい中にも親身あふれる先生方との信頼関係を築き、充実した高校生活を胸に実社会に飛び出していった卒業生達。卒業後も先生方や友と過ごした3年間がいつまでも忘れがたいのか、盆休みや正月休みともなると、仲間と連れだって、ひっきりなしに母校を訪れてくれる卒業生。母校が閉校し、行き場がなくなる卒業生のことを思うと胸が締め付けられる。

挨拶等の生徒指導も行き届き地域の信望も厚く、企業の評価も高い学校を閉じることに何か割り切れない思いがどうしても心をよぎる。伝統と歴史を閉じることは、今まで有商に携わってこられた全ての方々声を閉じることであり、言葉には尽くせないほど、つらく重いことである。

最後の卒業生が「有商生でよかった。」と心から思ってくれることを願っている。みんなの想いをひと言。「～永遠に讃えん～ありがとう有商」

「国境の島」

長崎県立豊玉高等学校 中 島 賢 一

これまで海外旅行など1回も行ったことがなかった私に、4年前家内から突然「1番近い外国だったらいいでしょう。」という誘いがあり、韓国へ行くことになりました。高速船（ビートル）で福岡から出発して、途中、船の窓外に大きな島が見えてきました。以前にそこを通ったことがある家内から、「これが対馬よー」と言われた。その時は、「へー、これが対馬か。緑が綺麗なところだなあー」と思っただけで、そのまま島の横をスーッと通って韓国へ行きました。縁とは不思議なものです。まさか自分が対馬に赴任するとは、その時は夢にも思いませんでした。

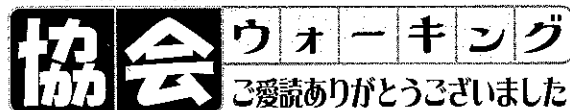
対馬に赴任した時は、車と一緒に福岡からフェリーで来ました。4時間半もの船旅でした。厳原に着いた際、「遠いところへ来たなあー」というのが実感でした。たまたま近くにあったレストランへ入った時、ドヤドヤと数人で2組のお客が入ってきました。そのお客さん達がしゃべる言葉は、日本語ではなかったため、私はびっくりしました。彼らの言葉は韓国語でした。「えーっ!?ここはどここの国かなあー」と思いました。対馬のラジオには、バリバリというノイズ混じりに韓国放送は入るし、テレビの映像も時々邪魔されます。また、対馬島内では、あちらこちらでハングル文字をみかけます。まさしく「国境の島」なのです。

対馬は、地理的には日本本土よりも韓国の方に近く、韓国とは49.5kmしか離れていないところです。大自然に恵まれ、魚がとても新鮮でおいしく、非常にすばらしいところです。魚も本土近海よりも大物がいるため、釣り好きの人には絶好の島です。(後は腕次第ですが……)

早いもので、対馬生活も2年目に入りました。日々、事務長職の重大さや責任の重さをひしひしと感じておりますが、以前と職務が変われば、見えないものが見えるようになった部分もあります。

「浅学非才」、元来の「上がり性」、「口下手」で苦慮はしておりますが、これからも微力ながら、地域にしっかり根ざした学校を目指して、学校経営の一端を積極的に進めていきたいと思っております。

●事務職員一●



県公立学校事務職員協会 長 吉 田 寛 治
(長崎南高等学校)

平成15年10月1日の第14号から6回に渡り、本協会会員の代表者の近況や思いを掲載させていただきましたが、このたび、本協会、季刊紙「New School Office」を発刊する運びとなり、今回で終了させていただくことになりました。これまでのご愛読並びに本協会唯一の広報手段としてこの紙面を活用させていただき、誠にありがとうございました。

最終回に当たり、執筆いただいた方のコラムを改めて読み返してみました。その文章には、それぞれ、主役で

ある児童・生徒のために、あるいは、忙しい先生たちのフォローとして自分たちが出来る範囲で、児童・生徒に接していることが記載されていました。事務職員の資質向上の根底には、「学校事務に対する情熱、そして、児童・生徒、学校を限りなくとおしいと思う心意気を持って事に当たる。」ことが大事だと思います。まさに、この思いに合致する嬉しい、頼もしい文章でした。

本協会では、本年度から流行に惑わされず、行政事務の基礎力強化を図るため、研修・OA・広報の3専門委員会を設置しました。委員会活動が、資質向上の根底を育むとともに、児童・生徒の将来のために生かすことができればと思う次第です。

今後とも、本協会に対して、事務長会の皆様方のご支援、ご協力をいただくとともに、お力添えいただくようお願いして、終了とお礼のごあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

会 員 漫 筆

「囲碁雑感」

長崎県立口加高等学校 古川 武

人に趣味を尋ねられた時に、「囲碁です」と胸を張れる程の棋力も無く、最近の20年近くは碁石を握ることも年に数回程度で、趣味と言うにはおこがましいのですが、大抵の方のお相手ぐらゐは出来るので、趣味と言っても良いのかなと思っています。

昔は、事務室も含めて、学校では碁を打つ人が多く、昼休みともなれば、弁当を片手に碁盤を挟む光景がいたる所で見られましたが、宿日直制度が廃止され、宿直代行員制度が導入された頃から時間的余裕も無くなり、今県下で昼休みに碁盤を出せる学校が一校でもあるとは考えられず、少々寂しい気もします。

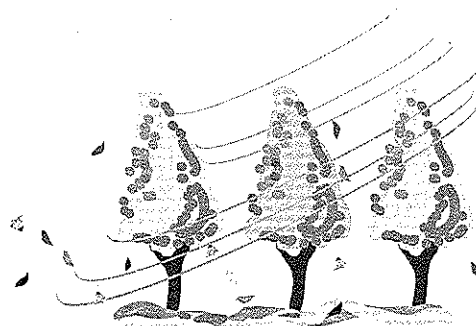
平成元年・2年に長崎県事務職員囲碁大会なるものが開催されたことがありました。松尾政美有馬商業高校事務長(当時)の肝煎りで、会場は島原市の九十九ホテルでした。長崎、佐世保からの参加もあり、かなりの盛会でした。優勝者は二年連続椎山事務長(平成5年没)で、他の団栗の背比べとは一線を画す強さを見せつけられました。池田事務長、氏田事務長、吉賀事務長等々、腕よりも口に自信のある先輩方の舌戦を懐かしく思い出します。

「島原は遠いので次回は中央でやって欲しい。」との参加者の強い要望があって第3回は大村市での開催が決定されていましたが、折悪しく雲仙普賢岳の噴火が始まり、地元の方々にとっては碁どころではなく、又直接の影響を被らない地域の方々にしても「仲間が苦勞している傍らで碁会でもあるまい」との意見も多く延期となりま

した。噴火は平成8年には治まりましたが、囲碁大会の方は再開されることはなく、現在に至っているのは少々残念なことでもあります。

現職の間は時間的に碁を打つゆとりの無かった方ほど退職後は碁三昧の生活に入る方も多く、中には「好き」を通り越して「ケモノ偏」のつく方もかなりいらっしゃるようで、榎林事務長、山口事務長等の先輩に用事がある時には、碁会所に電話すれば確実に連絡がとれるとの噂も聞いております。

私も退職後はかような先輩方の助力を仰ぎ、退職事務長会囲碁大会を発案しようかなども思っています。というのも身近には退職校長会の碁会がっており、こちらは年3回の開催ながら50回を越す歴史を持っています。同好の士を募り、事務長会として団体戦を申し込みたいという望みもなきにしもあらずなのですが、何分、相手は中村康次会長の下、七段、六段の猛者が揃っており、現段階では挑戦というより、指導を受けるとしか言えない程の実力の差があります。しかし挑戦したいという希望は捨てていませんので、碁碁に手を染めている事務長の皆様、最近ではインターネットで腕を磨くことも出来ます。できうれば今より二~三日の上達をなされんことを願います。



ウチ

のここが
すばらしい

「地域の恵みを糧にして」

長崎県立鹿町工業高等学校 末 永久 幸

北九十九島を見晴るかすツツジの名勝長串山の麓に我が鹿町工業高校がある。現在の学舎は、平成7年度から約5年の歳月をかけて全面改築されたものである。建物や運動場などが、広々とした敷地に十分なゆとりと機能性を持たせて配置されており、県下に比類のない学習環境が整っている。

改築時に設置された太陽光発電装置は、本校の特色ある設備である。実習設備としては勿論、環境教育や省エネルギーの面からも存在意義は大きい。学校敷地から温泉が湧き出ている学校も恐らく全国で本校だけではないだろうか。温水は寄宿舎にも引かれ、生徒の活力の源と

なっている。

こうした恵まれた環境で、生徒達は部活動に学習に全力を注いでいる。今春の県大会準優勝を果たした野球部、高総体第3位のハンドボール部を始め各部とも躍進がめざましい。また、各種の資格取得にも全校挙げて取り組み、電気工事士資格取得者数で、この2年間連続県下1位、特に昨年度の第一種合格者数では全国第1位の偉業を成し遂げた。これらの成果が生徒全体に積極性と自信をもたらした、学校の活性化につながった。

もう一つの特長は教職員の若さと情熱、そして自由闊達な校風である。本校には、本年度「情報広報部」が組織された。生徒の確保と進路保障という専門高校の課題に対応するため、学校の魅力を積極的に発信していこうという若手職員の発想から生まれたものである。

地元鹿町町の学社融合の町づくり・人づくりは、県内でも先進的な取組みである。我が校も中学校への出前授業や小中学校教職員との合同研修会、地域でのボランティア活動などを通してその一端に関わらせていただいている。今後とも地域とともに発展する学校でありたい。

がんばらんばの想い

～人と継続～

長崎県立国見高等学校 中路 徹

小嶺忠敏 私が国見高校に着任したときの校長である。テレビでよく見た顔が最初は眩しかったことを記憶している。よくご存じのように、九州の片田舎の高校サッカー指導者として、ゼロから出発して全国高校選手権大会等で17回の全国制覇を成し遂げるまでにした人物である。

私の最初の疑問(興味)は、ここまで実績を達成してきた小嶺先生のどこが、我々と違うであろうかということであった。お会いしてから1年以上経った今、私の中で明らかになったものがある。

それは、夢(志)への強い決意と、その実現に向けた熱(意)の継続である。そして、サッカー(スポーツ)を通じた人づくりである。

61歳になった今も、朝練開始6時前には必ずグラウンドに立っている。「授業に遅れる先生が、遅刻した生徒を叱る資格はない。生徒とは競争だ。」

「あいさつ・返事・後片づけ」等基本的しつけを厳しく指導する一方、努力している生徒への配慮も忘れない。「高校の3年間は90歳まで生きる人生の30分の1でしかない。」「指導者の仕事はピッチ外が7割だ。」国見高校サッカー部の進学者が大学でのキャプテン等指導的役割につくケースが多いのは偶然ではない。

1人のサッカー指導者(教育者)が、国見高校はもとより長崎県いや九州のサッカーに大きな変革をもたらしたことは間違いない。

その小嶺校長が平成16年4月、「サッカーだけでなく環境も高校日本一」を目指した「国見高校EMS」のキック

オフ宣言の笛を吹いた。

この活動内容については、平成17年度高教研事務部会集録「地球環境にやさしい学校づくり」(本校原口主査著)を読んでもらうことにして、ここにも1人の教師が大きく関わっている。

その人の名は、渡辺博光 理科教諭

平成12年度長崎県地球温暖化防止実行計画説明会に参加し、地球環境の危機的状況を理解した彼は、早速、2学期から取り組みを開始した。

環境美化委員を動かして、消灯の徹底、エアコン等の設定温度、節水、ゴミの分別(排出量の記録)再利用紙の分別等を実施するとともに、電気水道量・ゴミ排出量を毎月記録・グラフ化して生徒教職員への広報・啓発活動を行った。その結果、電気節減等実績は県下トップクラスとなり、光熱水費全体では100万円の節減を達成することが出来た。

しかし、この取り組みは、渡辺先生に負うところが大きく、16年3月、彼が定年退職を迎えるにあたり、活動の中心指導者を失うこととなった。

前述のキックオフ宣言(EMS導入)は、渡辺先生の取り組みを、学校の中で仕組みとして根付かせることを目的としたものであった。

上記二人に共通することは、それぞれの立場と内容は大きく異なるが、その熱い思いと地道な実践が大きな流れ(変革)を作り出していったことである。

しかし一方で、熱い思いの人を失ったときの継続の困難性の課題はいつも残るものである。

特に、環境活動は、その成果が直接見えにくいものであり、生徒や教職員が毎年入れ替わっていく学校に於いてはその活動の実効的継続は困難を極める。本校においても、強力な推進者を失った今、環境活動の必要性を今一度明確に認識して、校内システムを見直し、地道な実践活動にその活路を見いだそうとしている。

あのマザー・テレサは、「愛情」の反対は「無関心」と言った。家族愛・学校愛・郷土愛・民族愛・人類愛、まさに、人々が共生するための心の在り方をこの環境問題は問いかけている。無関心ではだめなのです。

編集後記



暑かった夏もあっという間に過ぎ、朝夕はめっきり涼しく秋を感じるこの頃です。9月17日夕方に本県(佐世保市周辺)に上陸した台風13号は、風速40m/sの暴風域や雨量等に高い警戒レベルで台風対策をするよう気象予報がなされ、その進行方向に強い関心を持つことを余儀なくされていた。台風一過、今回の台風で多数の学校が少なからず被害を受け、その被害(災害)報告や後片付けに追われる日々の事務室もあると聞く。用事ができ久しぶりに野母崎へ出かけると、山々の木々は緑色であるべき葉っぱの大半が茶色く変色し、大量の落葉した木の葉が道路脇に積み重なっている光景は

普段見る9月の景色と異なる印象を感じた。

会報紙「ばってん」第20号発行にあたり、日々多忙な中での原稿執筆をいただいた方々に深く感謝いたします。9月は各校とも文化祭、体育大会等の学校行事や創立周年行事が開催される学校、10月の秋季事務長会に向けての各部活動・研究発表・研究協議等の準備及び学校業務に追われる毎日と思えます。広報部では、現在の会報紙の紙面構成となってから4年(発行号数9号)経過することもあり、編集方法(発行内容・継続の可否も含めて)等について、今年度を目処に会員の意見を聞きながら方向性を検討したいと考えています。(20号は試行で一部紙面構成を変更しました。)ご意見をお訊きしますのでご協力をお願いします。又、会報第21号(発行日平成19年3月31日)の原稿寄稿の募集等を事務長メルマガで配信する予定にしていますので、原稿執筆方よろしくをお願いします。(M)